

イエス様と出会った私たちが今週もまた神様を礼拝するためにこうして神様の御前へと集められて参りました。そこで、皆さんに伺いたいことは、皆さんにとってのイエス様との出会いとはいったいどういうものだったのかということなのです。その動機、切っ掛けについては様々あるのですが、ただ、動機の違いはどうであれ、神様はその違いを含めて御業を現してくださったということです。だから、私たちの今があるわけですが、ちなみに、私が教会に足を運ぶようになったのは、そこに確かな何かがあり、その確かな何かを実際に手にできると、そう思ったからです。そして、その確かな何かを実際に手にすることができたわけですが、ただ、そうすると、当初の目的は達成されたわけで、それゆえ、最早、用はない、そういうことにもなるでしょう。では、それを手にしたのはいつだったのか。それは、教会の門を初めてくぐったその時でもあります。けれども、教会の門をくぐり、すぐにそれが分かったかということそうではありません。それが分かったのはつい最近のことでもありました。では、どうして、そこまで時間が掛かってしまったのか、それは、私が分かろう分かろうとしていたからです。けれども、いくら分かろう分かろうとしてもさっぱり分からない、そういう時間が何十年も続きました。ですから、それでよく牧師を続けることができたなとそう思う方もきっとおられるでしょうが、言われるまでもなく私自身がそう思っています。しかし、ある時のことです。これまでを振り返りそこで知らされたのです。

週報にもありますように、先週の木曜日、みくに幼稚園では第88回卒園式が行われ、19名の子どもたちが幼稚園を後にすることになりました。そして、子どもたちは私の悪い印象だけを持って幼稚園を離れたわけではなく、幼稚園でのたくさん楽しい思い出、先生方と過ごした豊かな時間、そして、何よりも自分が過ごしてきた藤沢教会というこの全体の景色、子どもたちのそれぞれがそれを胸

に刻み、ここを巣立っていったわけではなく、そして、その一つ一つを子どもたちが後々に振り返る時、そこで思い出すことはそれぞれの胸に刻まれた一つ一つの楽しかった思い出でもあるのでしょうか。けれども、それと共に、その全体として見えてくるものが、私も求めた確かな何かであるように思うのです。そして、この確かな何かとはイエス様と出会ったということであり、間違いなく、ここ藤沢教会を通して子どもたちはイエス様と出会い、そして、その出会った子どもたちの手をイエス様は決して離すことはない、それが私の今の実感です。ですから、私のぐだぐだの話を含めて、すべてのことはイエス様と繋がっているわけで、そして、御言葉がこの日私たちに伝えてくれていることもこの繋がっているということでもあるのです。

そこで、御言葉はそのイエス様との出会いについてこう語ります。「通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『私に従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った」と、罪人として、誰からも本気で相手にされることなかったマタイに向かい、イエス様は「私に従いなさい」と呼びかけたというのです。このことはつまり、イエス様が罪人であるマタイのことを切っても切れない関係性の中にお召しになったということですが、そこで大切なことは最後のところで「私が来たのは、正しいものを招くためではなく、罪人を招くためである」とイエス様がこう仰っておられることです。このことはつまり、イエス様に招かれるということは、その人が招かれるにふさわしいかふさわしくないか、純粹であるか不純であるか、そういうことではなく、イエス様が罪人を罪人のままご自分の交わりに招かれた、大切なのはこの事実であるということです。それゆえ、その罪人が召され、イエス様につなぎ合わされたわけですから、後のことは自ずとついてくるということです。つまり、それが収税人マタイであり、私たちであり、みくにの子どもたちであり、その保護者であり、職員

であるということです。ですから、そのような私たちについて、旧讃美歌 532 番が「世にはなき交わり」と歌っていることは実に肯けることです。それゆえ、この「世にはなき交わり」は、世の中で相当目立つことになります。けれども、そうであればこそまた、そこにはいいものばかりではなくて、それ以外のいろいろなものも、有り難いものも有り難くないものもいろいろ集まってくることもなるわけです。

ただ、この日の御言葉を見る限り、この、いろいろなものが集まってくることをイエス様は否定的には捉えてはおりません。むしろその逆です。なぜなら、鼻つまみ者の徴税人や、面倒くさい相手であるファリサイ派の人々とも、イエス様は食卓を共にしているからです。ところが、そのイエス様に対して、ファリサイ派の人々はどのような反応を見せたのか。自分のことを棚に上げて、それも直接イエス様に何かをいうのではなく、イエス様の弟子たちに向かって、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と尋ねたということです。それは、彼らにはイエス様のことが分からなかったからです。ただ、まったく分からなかったのかと言うとそうではありません。イエス様ではなく弟子たちということとは、それはイエス様に遠慮があったからでもあります。ですから、そういう点で、彼らにはイエス様がどういうお方であるかは分かっていたということです。それゆえ、それについて善意に捉えるならば、イエス様のことをもっともっと知りたい、分かりたい、でも、嫌われたくはない、ファリサイ派の人々が弟子たちに尋ねた理由はそういうことであつたということです。なぜなら、知りたい、分かりたい、嫌われたくない、それを意識することは、人と人との関わりにおいてはとても大切なことだからです。

ただ、イエス様のことが分かって、そのイエス様に心の底から好かれて受け止められている、それが分かってさえいれば、イエス様が十字架につけられることはなかったのでしょうか。ですから、知りたい、分かりたい、嫌われたくない、イエス様に対して私たちがそう思うことは必要なことだと思います。けれども、自分がどう思っているかはともかくとして、そこには相手があるわけです。です

から、自分の気持ちをただぶつけるだけでは、物事はうまくいくはずもありません。従って、そう考えるなら、ファリサイ派の人々の配慮は決して行き過ぎたものではありません。ただ、そこには一つ大きな問題がありました。それは、イエス様との間には距離があり、そのため、彼らは本音を直接イエス様に言うことができなかったということです。また、それだけではありません。この「どうして」との問いかけがイエス様に対するネガティブなニュアンスを含んでいるように、そこには「部外者」としてのイエス様への批判が含まれていたということです。まただから、それを見抜いたイエス様は、「医者が必要とするのは丈夫な人ではなく、病人である。『私が求めるのは憐れみであつて、生け贄ではない。』とはどういう意味か、行って学びなさい。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と仰ったわけです。

ところで、イエス様のこの言葉の中で一番大事なことは何なのでしょう。イエス様がいかなる方であるかを知ることでしょうか。イエス様とその食卓を共にしている意味が分かることでしょうか。それとも、イエス様の前で恥をかかないようにすることでしょうか。あるいはまた、自分は罪人、病人だとのレッテルを自分自身に貼ることでしょうか。また、私たちの多くは、もしかしたらイエス様の食卓に集められたその時、ドキドキ、ソワソワ、おどおどしていることが多いように思うのですが、けれども、少し慣れてくると今度はどうでしょう。では、この慣れを、御言葉は、イエス様のことを分かってと言っているのでしょうか。また、そのイエス様が私たちに望んでいることは本当にそういうことなのでしょうか。

イエス様がここで「私が求めるのは憐れみであつて、生け贄ではない」と仰るこの言葉はホセア書 6:6 からの引用です。そして、この言葉から分かることは、イエス様がまるで取引するかのようになり、私たちを招かれたわけではないということです。なぜなら、イエス様の十字架の出来事が示すように、神様とイエス様の御心は、目の前にある病人、目の前にある罪人を救いへと無条件で招くことでもあるからです。そして、それは、やってやろうといった、傲岸不遜な動機か

らではありません。私たちと同じところに立って、この私たちの寂しさや苦しみ、その痛みや悲しみを間近に感じられるところから、しかも、私たちのことをすべてご存知の上で、手の掛かるその私たちと心底関わろうとしてのことでもあるからです。ところが、私たちにはそれが分からない、分からないから、分かるう分かろうとして分かるところで物事を判断してしまう、ただし、それは分からないわけですから仕方ないのかも知れませんが、けれども、ファリサイ派の人々がここで罪人と一緒にあることを問題視しているように、私たちがもし彼らと違うというのなら、私たちは主の食卓に集められたとき、どのように振る舞えばいいのでしょうか。このファリサイ派の人々とも同じだとしたなら、イエス様から見れば、そういう私たちはどのようにその目に映るのでしょうか。それは「部外者」ということになりはしないでしょうか。しかも、今の私たちがそのことを余り意識していないとしたら。ただから、イエス様と取引するかのよう、自分はいい子でしょ、かわいいでしょ、あなたのことをよく分かっているでしょ、と、まるで部外者のように、私ってこういう人間ですよと訴えたりもするのでしょう。ですから、イエス様が「行って学びなさい」と仰ったのはそれゆえのことでもありますが、このことはつまり、私たちにイエス様のことが何も分かってはいないということです。それゆえ、この部外者のような私たちの立ち振る舞いをしてしまうのですが、ただ、このことはイエス様のことを心の底から傷つけることでもあるのです。そして、それがイエス様の十字架の出来事であり、そうであるからこそまた、私たちは「行って学ぶ」ことが求められているのです。

私たちにとってイエス様とはいかなるお方なのでしょうか。それは、もちろん、恐れ多いお方であるのは間違いありません。ただ、イエス様は私たちにそう呼ばれることを本当に願っているのでしょうか。ただありのままを見て欲しい、それがイエス様の心からの願いなのではないのでしょうか。それは、私たちとイエス様との間にはいつも温度差があるからで、ただから、私たちは部外者のように振る舞ってしまうのでしょうか。しかし、そこで仲良くしようよ、分かり合おうよと、言葉の上でいくらそう繰り返

たところで、それでお互いの距離が縮まるわけではありません。ですから、出会ったばかりの私たちとイエス様との繋がりは、人と人との関係性が初めから望ましい形で築かれてはいないように、心許なく、それゆえ切れやすい、少なくとも私たちの目にはそのように映っているはずなのです。ですから、そういうときに私たちがよくすることは相手との取引です。ここで、イエス様が「私が求めることは憐れみであって、生け贄ではない」とホセア書の言葉を引用しているのは、生け贄という形で神様と取引しようとする、そういう私たちの心根の奥深くを見つめてのことでもあるのです。ただし、そうした心根によって関係性が深まることはありません。もちろん、『情けは人のためならず』と言われているように、気遣いは大事なことです。けれども、それで本音を口にできないとしたら、関わりは冷めたものとなり、いつ切れたとしてもおかしくはありません。ですから、イエス様が「行って学びなさい」と仰ることは、その細くいつ切れてもおかしくはない糸を太くすることを望んでのことでもありますが、そのために求められることが憐れみであるということです。つまり、優しさであり、思いやりです。互いに互いを深く知るために本音を言い合い、少しずつ時間をかけて細い糸を太くしていくこと、イエス様は学んできなさいと仰っていることはこのことです。

そこで皆さんにお尋ねしたいのは、皆さんは自分のことを優しいと思えるのでしょうか。心から人と寄り添っていると胸を張って言えるのでしょうか。優しさも人に寄り添うことも、言葉の上だけのことではありません。相手の心に自分自身のありのままの姿を注ぎ出すことです。ただから、その他者は、私たちの気がついてはいない自分自身の姿をすぐに気がつくことにもなるのです。けれども、それは私たちにとってはとっても恐ろしいことです。それゆえ、優しさも寄り添うことも、身を削り、身が細る思いでしかなしえないことでもあるのです。ただから、お先にどうぞと他の人にお任せしたくもなるのですが、けれども、ここでイエス様が口先だけで何かを語ってはいないように、だからこそまた、私たちはそれを行って学ばなければならないのです。では、そのために私たちは何をすればいいのでしょうか。それには急がず

に少しずつ時間をかけて、求められることを一つ一つやっていくことです。なぜなら、そのためにイエス様は私たちと出会ったからであり、そして、その出会った相手が私たちであるということです。それは、主にある交わりがその場限りのものではないからです。御国の到来まで続くものであり、それゆえ、私たちがイエス様と御国での再会を願うなら、その繋がりがいつ切れるか分からないものであってはならないのです。

ですから、そのために私たちは本音で語り合う必要があるのですが、ただ、それは私たちにとってはとても辛いことです。特に、今は、その点で難しい時代であるように思います。本音を堂々と語ることを多くの人がリスクのあることと理解しているからです。まただから、この辛さを避けようとして、やれ罪人だ、やれ病気だと、互いにレッテルを張り合っ、分かり合えない人たちを排除し、分かり合える人たちとだけ関わりを持とうとするのです。ですから、その行き着く先がどこかは皆さんもよくお分かりのことだと思います。国と国との間でのことといえば、それが戦争というものでもあるのでしょうか。ただそういう大きなことではなくても、本質的に近いところのものは私たちの足下に常に置かれてもいるものでもあるのです。ですから、そのような状況の中では、手の掛かる足手まといな人たちはすべてコストパフォーマンスの悪い人たちと見なされかねません。そして、それが私たち罪人の現実の中に起こりうるなら、そういうことは私たちの足下になく、実際にあることです。けれども、この己が罪を知っている私たちであるなら、この罪の現実から目をそらすことは私たちにはできないはずなのです。

では、その私たちが本音で言い合えるはどうしてなのでしょう。それは、私たちが外に出て行く前にそのホームグラウンドがあるからです。けれども、そこは、自分の言いたいことをいいたくだけ言えるような、そういう言い放しの許される場所ではありません。語る以前に相手の語る本音に耳を傾ける場所であり、そして、そこで語れる言葉は聖書の御言葉であり、この御言葉に養われた言葉でもあるのです。そして、私たちはその言葉を本音を言い合える場所で身につけるのです。そして、身につけた言葉を

さらに磨くために、出て行って御言葉の真実、その力を学ぶのですが、そのように私たちが外に出て行くことができるのは、そこもまたイエス様が共にいて下さる場所だからです。イエス様が共にいて下さっているから、分からずに困っている私たちはそこで耳を澄まし、また目を凝らして、イエス様のその声、そのお姿に触れるのです。ですから、それには動き回るだけではなく、時に立ち止まり、イエス様の語るその本音に聞いていかなければなりません。そして、そのために求められることがイエス様の前でじっと動かずにいることなのです。

けれども、出会ったばかりの者にとっては、それはとても不安なことです。イエス様との繋がりが絶対に切れないということが分かっていないからです。それゆえ、いつ切れるのだろうか、そんなことを繰り返し繰り返し考えてしまうのです。そして、そうした中で私のしたことがイエス様のことを分かって分かってすることでしたが、今思うことは、その私とイエス様は逃げ出さず関わってくださっていたということです。それは、私が皆さんと同じように「世にはなき交わり」の中にこうしてあるからです。そして、そのことを知らされたのは、日々、色眼鏡で物事を見ない子どもたちと一緒にいて、イエス様の本音に触れることができたからでもあります。つまりは、それがイエス様と出会い、今こうして私たちが共にある教会という場所でもあるのです。

優しいという言葉が「人偏に憂い」と書くように、憂いを遠ざけて、人は人に対して優しくなれることはありません。そして、悲しみであり、苦しみであり、寂しさであり、痛みであり、私たちが根源的に持っているこの憂いは私たちのこの交わりの足下に常に認められるものでもあるのです。けれども、その中で、私たちが人に寄り添い、優しく、憐れみ深くあることができるのは、他でもないイエス様が私たちに寄り添い、優しく、憐れみをもって接してくださっているからです。ですから、そのことを行ってそれぞれの置かれた場所で学び続ける私たちがでありたいと思います。祈りましょう。